春号
第313号

一粒の麦

社会福祉法人エデンの園
2019年４月20日

ひとつぶのむぎ

第１回くにとみ春風コンサート

３月２日(土)「第１回くにとみ春風コンサート」が国富町農村環境改善センターの大ホールで開催されました。エデンの園からはＳＫＢ（サンライズくにとみバンド）、ＫＣスピリット、向陽の里からは「えばー☆ぐり→ん」が歌い、演奏しました。特別ゲスト真北聖子さんが花を添えました。

えばー☆ぐり→ん

出演者全員で合唱

ＳＫＢ

ＫＣスピリット

真北聖子さん

聖書のことば

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。（聖書　ヨハネの福音書12章24節）

～ ゴ ジ ラ ～

施設長　廣　瀬　　惠

夕方、陶芸室の引き戸を開けて中に入ったら、「ドキン！」驚きでちょっと後ずさりしました。作業台の上に見慣れぬ物体が二つ鎮座していたのです。よく見ると、高さ15センチほどのゴジラでした。

怪獣映画世代の者としてはなつかしく、思わず手に取っていました。それはずっしり重く、ごつごつしており背中にはあのイボイボも長い尻尾もありました。けれど顔はなんか優しい。陶芸班の新作だな。よくよく観察すると、小さく丸められた粘土が幾重にも重ねられています。なかなかの力作です。明日、河野さんに誰がどのように作ったのか訊いてみよう。河野さんはエデンの園が開園した1978年からの仲間です。定年退職後、余暇活動の美術の指導者としてエデンの園に帰って来ていただき、昨年４月からは陶芸班を見ていただいています。

「誰が作ったんですか？」と尋ねると「コウノさんとカワノさん」、とのこと。３日後、二人のゴジラづくりを拝見しました。幸野さんは親指と人差し指と中指の３本で粘土のかたまりから親指大をちぎりとり、同じく３本の指で器用に丸める。そして、ろくろの上にポタンと落とす。それを何度も何度も繰り返すと約200粒ほどの丸い粘土は粘着力で横にも広がり縦にも重なりました。こぶしほどのかたまりになったところで、河野さんの登場。両掌(てのひら)で重ねられたかたまりを囲い、中心に寄せ集めると、あら不思議、それはむくむくと盛り上がり、ひとつの、そう、生き物になったのです。手足や顔と尻尾をチョチョット整えるとゴジラができました。幸野さんにそれを触ってもらうと、はずんだ声で「できたねぇ。」と…。

昼休み陶芸室でお茶をいただきながら河野さんにインタビューしました。「陶芸班のみなさん、いつも楽しそうですね、」ではじまり、幸野さんのゴジラづくりの話を伺いました。以下は要約です。

粘土を触り、その感触を楽しみ、自由に形を作ることに面白みを感じている利用者がおられます。幸野さんもその中の一人です。彼は陽気で明るく、粘土を丸めながらいろんな話をしてくれます。グループホームや家族の事、友人の事、童謡を歌うこともあります。彼はおしゃべりしながら粘土をちぎって丸めて重ねてという作業に「作っている」とか「参加している」という実感を持てるようです。私は彼がちぎり丸めた粘土のかたまりに輝きを見ました。単なる「かたまり」ではなく、幸野さんからの何かの発信だと思ったのです。そこで色々と考えた末中央に集めてみたらゴジラになりました。私がちょっと手を加えていますが、私の手は、絵で言えば額縁のようなものです。

しかし、大切なのは幸野さんにとってゴジラ製作以上の何かがここにあるということです。それは、自己表現であり、達成感であるとともに、共同作業と語り合いの中で、充実感を覚えるということかもしれません。また、盲重複障がいのために感じる様々な生きづらさからの解放とも言えます。私は数年のブランクがありましたが、エデンの園に戻ってきて改めて気づいたことがあります。それは、作品の中に一人ひとりの思いの何かが詰まっているということです。その思いの中身を明らかにすることが私たちの役目ではないかと考えています。

なるほどっ。私は河野さんの話に引き込まれていました。「ゴジラ」は粘土粒を作る幸野さんと、受け手の河野さんの経験、技術、知見そして何よりも、幸野さんに対する暖かなまなざしから生まれた作品でした。一かたまりの粘土に輝きを見つけけた河野さんに習い、利用者の皆さんの素晴らしい才能や感性に気がつく私たちでありたいと願っています。そして利用者を引き立てる良質の額縁でありたいと願っています。

※5ページに「ゴジラ」ができるまでの工程を紹介いたします。